

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を見直している。 当事業所を含め3施設あるので、各ホームの特色を生かした目標設定を検討中	法人の事業展開も時の経過に従い変わってきており、従来からの法人の三つのケア理念を見直しており、主旨そのものを大きく変えるのではなく、現状に沿ったわかりやすいものにしていこうという方向性が示されている。また、それを基にホームとしての年度目標も独自に立てようになっているが開設間もないこともあり色々な面で整備中のため今後の取り組み課題となっている。利用者や家族には重要事項としてホームの運営方針などを説明している。新設のホームでもあるため初めて介護の仕事に就く職員もおり開設前の研修やミーティングで自分達は何を目指しているのかを具体的に話し合っている。	法人の理念の見直しに沿って、それを具体化するためのホームとしての年度目標の立案に早期に取り組み、来る2ユニット体制へ備えていただくことを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地区自治体と災害協定覚書を取り交わし済み 地域内の散歩・買い物・施設見学(交流)の受入を常時実施。 地域行事への参加も検討中(11月予定)	地区に協力費を納め、行事などのお知らせを区長から流していただいている。近くの小学校の発表会の練習の見学予定なども組まれている。歌、詩吟、紙芝居など、地域のボランティアの来訪もあり利用者も楽しんでいる。職員の呼びかけにより畑仕事の若いボランティアが遠方からも訪れている。開設間もないこともあり、ホーム紹介用のパンフレットを公共施設に置かせていただき存在を知る住民も徐々に増えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症サポーター・キャラバンメイト養成研修に2名参加予定(11月) 地域の方からのご相談等への対応体制は出来ているが、受け身である。こちらから発信していく手段を模索中		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	介護相談員さんへの協力要請済み(9月から来所して頂いており、推進会議への参加依頼済み) 災害協定覚書取り交わし済み	利用者、家族、区長、民生委員、広域連合職員、市職員が参加し定期的に開催されている。今後、介護相談員も参加する予定である。利用者状況や活動報告等の報告様式が広域連合として定められており、それに沿い出席者から意見や助言をいただいている。開設初年度でもあり地域の方や広域連合職員への質問事項が多い。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議にご参加いただき、グループホームが地域においてどのような役割を果たせるのかの理解を深めるご協力をいただき、地域に根ざしていくにはどうすれば良いかご助言をいただいている。	市主催の事業所連絡会や研修会、ケアマネジャーの集団指導の場に参加している。9月から介護相談員1名が来訪しており、利用者と話した後、職員と意見交換している。家族からの依頼を受け介護保険の更新申請なども行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	防犯上、玄関の施錠を行っているが、行きたい時に行ける支援を施行中。 身体拘束に関する委員会を立ち上げ、全職員に正しく周知してもらうべく活動している	法人の中に身体拘束委員会があり、事例研究も含め行動を制限したり拘束をしたりすることのないように取り組んでいる。起き上がりが不安定な利用者に関して、センサーを使用することもあるが関係者で話し合い、限られた時間帯のみの使用としている。家がどうなっているか心配で帰宅願望の強い利用者には職員が同行し安心していただくこともあり、自由に気分良く過ごせるよう全職員で取り組んでいる。	

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃のケアの様子をお互いに確認しあい、虐待等に発展していかないよう、職員間で話し合う機会をもっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修や自己学習の中で成年後見制度等について学ぶ機会はあるが、実際に活用や活用を検討する事例はいまのところない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約には十分時間をもち、個々に応じて納得していただけるよう努めている。また、その時々で疑問点や不安に思われていることについて、随時説明や状況報告を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族来所時には出来る限り顔を合わせ、少しでもお話を伺えるようにしている。また、ホーム内にご意見箱を設け、口頭では言いにくいご意見も表出していただけるようにしている。	ホームに慣れていただくために利用者の受け入れも徐々に行われているが、7名の利用者全員が口頭で要望等を伝えることができる。家族の来訪は週1回から月1回とそれぞれの家族の状況により異なる。来訪された家族には本人の様子を報告し、家族から意向や気になること等を伺っているが開設間もない状況でもあり利用者の心身の状況も大きく変わることもないので意見・要望等は少ない。職員も家族との会話を大切に自然に対応しており、家族からもホームのサービスに満足しているとの言葉が聞こえている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃より職員からの意見をどんどん出してもらえ環境づくりを意識的に行っており、出てきた意見はマネージャー会議に持っていき、法人運営に反映できるようにしている。	充足すれば2ユニットの体制になるが今のところ1ユニットの人員体制で夕刻の申し送りを重視し、検討事項などがあれば話し合い、運営やサービスに反映させている。申し送りは開設当初リーダー等が指導することが多かったが現在は職員の意見交換の場となっている。カンファレンスもその場で行い、介護計画の進捗状況や利用者の現状などについて話し合っている。法人として子育てをしながら働ける環境を整備しており何でも言え合える職場となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人として、子育て支援や有給休暇を時間単位で取得できるような環境づくりを行っている。また、その休暇を遠慮せず取得できるような雰囲気づくりも合わせて行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修・社内研修とも実施している。外部研修は法人からの参加要請だけでなく、個々で興味をもった研修にも法人負担で参加できるようにしている。		

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県の宅老所・GH連絡会に参加している。また、他事業所の方とSNSにて近況を学び合っている。年に数回は顔を合わせての交流会を行っている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	必要な時にゆっくり話ができる体制が整っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入の前段階で、まず困っていることや心配なことをお聴きするなど、努めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	問い合わせや見学等の段階で、困っていることなどを伺い、どのようなサービスが適切なのか一緒に考え、必要であれば他のサービスへつなげられるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることを奪わないことに重きを置いている。時には本人が師となって時には職員が師となって・・・。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族への支援のお願いもするが、そのご家族のグループホーム入居までの経緯や心理状況なども察し、無理強いはせず、今後少しずつでも共に支援していける関係作りができるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご親戚やご友人など馴染みの方が訪ねてきてくださることがある。また、散歩など外に出る機会を作り、偶然にでも近所の方と会えるようにしている。	親戚や友人などがホームに来訪し利用前からの関係を継続している方がいる。ホームの近くから利用に到った方は散歩の途中で知人に会うことも多く挨拶を交わし会話を楽しんでいる。自分から家族に電話をしたいという利用者には支援している。一時帰省し家族とお墓参りに出掛ける利用者もおり、集団生活の中で馴染みの場所や馴染みの人との関係を少しでも継続し気を休めることができるように支援している。	

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士の関係は日々変わっていきます。職員が入ることで良好になるケース、入らない方が良好になるケースなど様々なので、そのときにあった支援に仕方をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今のところサービス利用が終了した方はおられないが、今後そのようなことがあっても継続して支援していけるような関係づくりをしていきたい。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	可能であれば、カンファレンスへの参加をお願いしている。困難な場合であっても、日々の状況や様子、話の内容などを基に、意向に添った生活を支援していけるよう努めている。	利用者全員が口頭で自分の思いや意向を表わすことができ、職員は一人ひとりの行動や発する言葉、表情などに関心を払い、接している。利用者同士でも話せる場所が数ヶ所あり、体調を心配しあったり、居室に様子を見に行ったりと一人ひとりの自主性を重んじている。普段物静かな利用者が職員と1対1になった時に職員への注意であったり身の上話など心の内を話していただくこともあり利用者一人ひとりの思いや意向の把握に日々取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス開始時の把握に加え、日々の生活の中から聞き取れる情報を追加記録している		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々様子が変わっていく状態や、新しく発見した有する能力、行動や発言など、主に記録や申し送りを通して職員間で共有し、その方の状況把握をオンタイムでできるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者会議と最低月一回は行うモニタリングの実施によって、日々の変化にも対応し、現状に即したサービス提供につながるような仕組みづくりをしている。	職員3名で1人が主、2人がサブとなり1名の利用者を担当しモニタリングも実施している。数名の職員によりカンファレンスが行われており利用者も参加し、本人の要望を計画に取り入れている。施設サービス計画書・支援内容のサービス内容欄には「家族、友人、ボランティアグループ等がすること」の項目が設けられ、地域密着型サービスとしての法人独自の様式となっている。家族にも介護計画を説明し、また、支援内容についても職員と話し合っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	カードックスを使用し、ケアプランや日々の記録だけでなく、医療者とも情報交換の記録や食事記録・排泄記録など、個々に必要な記録を見やすいカタチで共有し、ケアの見直し等に活かしている。		

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現状では思考段階だが、地域の困りごとに対してホームや法人として、お役に立つことができるようにしていきたい。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	日頃からのスーパーへの買い物、美容院などへの外出、今後は地域の行事への参加などを通して、より豊かな暮らしへと近づけるように支援していく。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後もかかりつけ医の変更はない。必要に応じて協力医の訪問診療を受けられるようにしている。	利用者一人ひとりの主治医を継続している。協力医による往診もあることから協力医に主治医を変更することも可能である。定期受診や通院については基本的に家族に付き添っていただいている。受審の際には医療機関宛に書面で情報提供(利用者本人の生活の様子、看護情報そして医師からのコメントなど)している。家族には健康面や医療面等での報告を詳細にしているため心配や不安を訴える家族は少ない。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	生活状況共有シートという書式を利用し、医療側への適切かつ簡潔な情報提供が行えるようにしている。また、ちょっとした相談事などは法人内に看護師に電話等で相談することもできる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	現在は入退院者はいないが、今後のためにスムーズな連携ができるよう関係作りや仕組み作りを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化や終末期の意向をお聞きしているが、そのときによって想いは変化していくものなので、定期的に、また状態変化が見られたときには都度確認していけるようにしていく。	契約時、利用者家族に看取りに関する事業所の方針を説明している。現時点では多くの家族がホームで最期を迎えることを希望している。開設から間もないので実際にホームでの看取りの経験はない。緊急の場合、法人の看護師に電話等で連絡をとることができる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人として救急救命講習の受講を検討中。		

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練を行っている。地区との防災協定を結び、相互に協力し合う関係づくりを行っている。	年2回、昼間・夜間想定避難訓練を実施することが重要事項説明書に明記されており、今年度6月には昼間を想定した訓練を実施している。実施時には利用者も参加し避難口まで誘導している。同時に消火訓練と通報訓練も実施されている。地区との防災協定も結ばれており、カーテンや布団も防災性のあるものを使用し防災設備も完備している。備蓄も徐々に取り揃えられている。	地域住民にも参加していただき協力を得ながら避難訓練等を実施していただくことと非常食や備品等についても拡充されることを望みたい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人に合った、ただ丁寧だけではなく、その方のパーソナリティを高められるような言葉かけ・関係づくりを心がけている。	検討前の法人ケア理念の二つ目に「尊厳をもって接すれば、重い認知症の人たちもケアすることが可能だという自覚を持つこと」とある。職員は開設時にそれぞれどんなケアをしたいのか話し合いをし認知症について理解を深めるとともに、介護のプロとしてケアの理念を意識し、日々利用者支援に当たっている。また、開設時の研修で情報の個別性や守秘義務などについても十分理解し実践している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	できるできないに関わらず、「何かしたい！」と思う気持ちを最大限尊重し、心が動く関わりや環境づくりを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の希望や、やりたいことを引き出し、それに添えるように支援している。入浴時間等は随時変更可能。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その方のレベルに合った支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	週1回(週3回)メニュー考案・買い出し・調理・盛り付け・片付けまで一緒に取り組んでいる。要望の合った漬物作りも行っている	現在は全利用者が常食で職員が声がけし偏りのないように副菜などを勤めてる。利用者も調理や盛り付け、後片付けなどのお手伝いをしている。毎週日曜日の夕食、火・木曜日の昼食は調理の日として利用者が主体になって食事作りを楽しんでいる。週1回各利用者が持ち回りで「お茶当番」をし、好きなお菓子を買ってきたり作ったりして他の利用者をもてなしている。家族や近所の人々からも収穫した野菜の差し入れがあり、味噌汁の具や漬物として利用している。ホームには畑もあり、夏野菜や大根、ほうれん草などを育て食卓に上げている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を活用し、見落としのないよう努めている。支援の必要な方については、一日の水分摂取目標量を設定し援助している。		

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自然な声掛けを心がけ、口腔ケアをしている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その方のおおよその排泄パターンを把握しておくが、決まった時間に声をかけるのではなく、自身で行っていただけるような関わり方をしている。同性介助の希望であったり、介助を行う場合も出来る限り希望に沿った形で行っている。	大半の方が自立しており布パンツで暮らしている。介助の必要な方には食前や食後など時間を見て声がけし、無理強いすることなく利用者の意思に沿ってトイレへと誘導している。各居室にはトイレと洗面台が設置されている。リハビリパンツとパットを使用している利用者が数名いるが自尊心に配慮しつつ支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄表や水分表を活用しIn/Outのチェック、オリゴ糖や寒天など自然食材の使用、日々の散歩への声掛け等、その方に合った支援方法を都度検討し実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個別に希望がある方にはその希望に沿った形で支援し、特に希望を表さない方には適宜声をかけ入浴へお誘いしている。	1日3名、週2から3回ほど入浴している。利用者は状態によりまれに職員の見守りを受けることもあるが一人1時間ぐらいうつかりと入っている。1階・2階には一般浴槽があり、更に1階に機械浴槽のある広い浴室があるが現在使用することはない。現在2階の1ユニットのみの運営となっているので2階の一般浴槽を使用している。時間は利用者の希望する時間帯で午前、午後どちらにも応じている。入浴を拒む利用者については違う時間帯に声がけするなど無理強いしないようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	決まった消灯時間等はなく、個々の意志を尊重している。その方の体調・レベルに合わせ、日中の休息をお勧めする。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬一覧(薬品名・量・効果・副作用)を作成し、職員への周知を行っている。新しく薬が処方になった際にはその方の様子等記録を残している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居時の聞き取りに加え、日々のケアから聞き取りを行っている。畑や・食事作りなど色々な事に取り組みながら個々にあった支援を探している。		

グループホームいずみの

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	「家を見たい」との希望に添って外出したり、週に1回の買い物の日を利用して物品購入を行っている。散歩の希望についてはなるべく希望に沿えるよう努めている	広い敷地内の散歩や個別の買い物、「お茶当番」のお菓子や材料の買出しに出掛けている。杖歩行の方が数名おり、散歩や外出時には途中で休めるように職員が折りたたみイスなどを持参している。春にはお花見、秋は紅葉狩りに出かけるようにしている。同じ法人施設の夏祭りに出掛けたり、近くの農協のスーパーや古民家ギャラリーに立ち寄りたり、ハケ岳の農場のアイスクリームを食べに出掛けたりしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自身で管理できる方は所持していただき、自身で買い物を行っていただいている。金銭管理が難しい方については、現金の所持はないが、立替という形で物品購入して頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ホーム内から外部へ電話や手紙を発信したいという希望は今のところない。外部からの電話や手紙はご本人にお繋ぎしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	どの空間も必要以上に広い空間は作らず、落ち着いて過ごせる環境作りをしている。共有スペースや居室にも窓があり、それぞれから畑や田んぼの様子が見れ、季節を感じることができる。	立地に合わせ建物全体として「く」の字型の構造となっている。食堂とリビングが「く」の字の内側部分にあり暖炉、テレビ、ソファ、食卓テーブルなどがコンパクトに配置されている。リビングや廊下にはタペストリーや押し絵、浮世絵などが掲げられている。寒冷地ということもあり共有スペースはパネルヒーターや暖炉、床段などで温かく過ごせるようになっている。廊下の一隅には利用者が談笑したり一休みできるようにソファが置かれている。2階には地域交流スペースも設けられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニット内に個別スペース(3ヶ所)を用意しているの、思い思いに過ごして頂いている。お茶を飲みながらゆっくり話している姿が見受けられる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人が使いなじんだタンスや家具等をお持ちいただくようお願いしている。居室に入りきらない家具も廊下に置くなど、極力馴染んだ物が多くある生活ができるよう支援している。	居室は共有スペースからの視覚に入らないように配置されており、ドアが縦格子状に赤、青、黄、緑などの色別になっているので利用者は自然と自室を覚えることができる。各居室にはトイレと洗面台、クローゼット替わりの幅が自由に組み替えられる棚、手摺り、ベッド、パネルヒーターなどが備え付けられている。自宅から持参したタンス、衣装ケース、家族の写真等を置いた居室も見られた。どの居室も利用者が安心し、その人らしく暮せるように工夫がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	キッチンや冷蔵庫などいつでも使える場所に配置し、必要に応じて使用していただいている。掃除用具などの置き場所も覚えて、自由に使われている方もいる。		